

受験番号	
------	--

日本赤十字東北看護大学
看護学部看護学科

令和8年度
自己推薦選抜（総合型選抜）二次募集

試験問題

[小論文]

【注意事項】

1. 小論文の時間は60分です。
2. 解答開始の指示があるまで、試験問題の表紙を開いてはいけません。
3. 試験問題の表紙・解答用紙に受験番号を書いてください。
4. 試験問題および解答用紙は切り離してはいけません。
切り離した解答用紙は無効です。
5. 空白の部分は、メモに使用しても構いません。
6. 質問があるときは、手をあげて試験監督者に知らせてください。

次の文章を読み、「人と人とのコミュニケーションのあり方」について、あなたなりの考えを示し、よりよいコミュニケーションを実現するために心がけたいことについて800字以内で述べなさい。

「今日はあなたのお祝いの日よね？」

「そんなことないわよ。あなたのその服が素敵よ！」

「〇さん、最近どうしてたの？」

「そうそう、うちは空港に近くて便利なのよ！」

これは、高齢者同士の会話の一例である。意味のある会話とは言い難い。

しかし、当人たちはとても楽しそうで、心がつながっているように見受けられる。

人間は、言葉を介して思考し、言語表現を通して他者との意思疎通を常とする。

しかし、老齢になると、相手の言葉を通して意味を理解する機能が衰えてしまうことがある。

こうなると、しばしば、会話の文脈や論理展開に無理が生じてしまう。

こうした高齢者をケアする人にとっては、どのようにコミュニケーションを成立させたらよいか戸惑うことが多いと伺う。対人関係の専門職として、「言葉」によるコミュニケーションを重視しているのにも関わらず、限界を突き付けられてしまうわけである。

一方、私の友人に優れた看護師がいる。彼女は、高齢者とも自分なりの関わり方で、いつの間にか心の通った信頼関係を構築している。

ある時、「高齢の患者さんと円滑に意思疎通するにはどうしたらよいか」と聴いてみた。

すると彼女は「患者さんの話をまともに聴かないことです」と笑いながら答えたのだ。私は、その一言にある種の衝撃を覚えた。

なぜなら、医療従事者の多くは、たとえ、理解に苦しむ表現であっても、患者の言葉を誠実に受け止めようと努め、論理的に返答することを常日頃から実践している。

ところが、彼女は「まともに取り合わないこと」を会話の常套手段としていた…。

私は、彼女の看護から学ぶことが多くあったわけだが、後日、彼女が患者さんと関わる姿を見届ける中で、次のことが分かってきた。

彼女は、自ら進んで意味が成立していない会話の中に積極的に身を置いている。そして、患者さんの「表情」や「動き」に気を配りながら、言葉だけではなく、感情を共有することに努めている。こうすることで、患者の心をほぐし、ごく自然なやり取りを通じて、相手の心とつながることを実践している。

つまり、彼女の看護は、「言葉」を聴き取る以上に、「心」と「心」をつなぐことを重視している営みなのだとと言える。

このことから、「コミュニケーション」は、「言葉」を介して、「意味」を捉える手段ではあるものの、「言葉」に頼りすぎてしまうと大切なものを見落としてしまう可能性があることに気づかされた。

現代は、医療従事者のみならず、多様な他者と多様な方法で分かり合うことが必要な時代である。私たちが、多様な他者と分かり合うためには、どのようなコミュニケーションのあり方が求められているのだろうか…。